

## 学校を核とした地域づくり

「学校を核とした地域づくり」の背景となる理念に、「教育こそがコミュニティ形成の手段であり、方法である」という考えがあります。つまり、子どもとの関わりの中で、[大人の学び]のコミュニティを創り、地域づくりを果たしていくことが期待されているのです。

大人の学びが活性化され、成熟した地域が創られていくことは、子どもたちの豊かな成長にもつながり、〈人づくりと地域づくりの好循環〉を生み出すことにもつながっていきます。

さらに武蔵野市の「開かれた学校づくり協議会」の役割として、地域の方たちが学校という接着剤でつながる場だけではなく、小中高生や大学生などの若者世代や保護者世代と、現在の地域づくりを担っている世代が“つながる場”としての意味合いも大きいのではないかと考えています。そうした意味で、多様な世代の委員が開かれた[対話]を行うことは、将来の地域を担う人たちの循環を形成する効果も高いのではと期待しています。

一方で、[学校を核とした学校づくり]の着地点がなかなか見えず、「多忙化する学校にまた新たな負担が加わるのではないか？」といった懸念が生じている…と感じる時もあります。

学校にとっても地域にとっても Win & Win の関係性を生み出す持続可能な取り組みであることが必要です。そのためには、何か新しい事業を始めなくてはならないという先入観や責任感にとらわれ過ぎることなく、既存の教育活動を「地域づくり」の視点から見直したり、新たに価値付けたりしていく合意形成のプロセスが求められると考えます。

私が考える「特色ある学校づくり」というのは、何か変わったことや目新しいことに差別化・差異化を求めるのではなく、自校の子どもたちの実態やニーズ、保護者や地域の方たちの思いや願いを踏まえた「学校らしさ」を追求していくことに他なりません。その際、当事者である子どもや教職員の声を聴くことが大切であり、当事者不在の議論になってはいけません。

昨年度から市立小中学校の「開かれた学校づくり協議会」の様子を参観させていただく中で、委員の方同士の[対話]が開かれ、その質が高まっていることをうれしく感じています。

「今までこうだから…」ではなく、「こうでもない、ああでもない…」と委員の皆さんが意見を言い合いながら、AとBを混ぜ合わせて新しいCの道を探っていくことが、本当の[対話]につながっていきます。そのために大事なことは、「相手を知ろうとすること」「相手の意見を丁寧に聴くこと」だと思っています。こうした[学び合える関係性]が今後もさらに育っていくことを心から期待しています。